



学校生活に驚きと発見

アーティストが市内の学校へ出向いて、授業を行うアーティストインスクール。アーツ前橋初の試みで、モデル事業として1月19日・26日、月田小に神楽太鼓奏者の石坂玄士さんを派遣。子どもたちと独自の楽器を創作し、その楽器で即興演奏を行いました。



CITY WATCHING

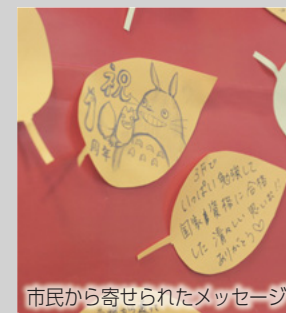
クローズアップ CLOSE UP

雪と氷の世界を楽しむ

2月4日に赤城山雪まつりを開催。銀世界の中、大沼の冬の風物詩である氷上ワカサギ釣りの体験や雪上宝探しなどを行いました。また、協賛イベントの前橋ホワイトフェスティバルでは、犬ぞりレースなどを実施。訪れた人たちを楽しませていました。

戦争を生き抜く人々を描いた「時計は生きていた」の読書感想文が、青少年読書感想文全国コンクール・全国学校図書館協議会長賞を受賞した。「この本は戦争中の小学生の前橋での暮らしを書いた本です。とにかく物がなかった当時の様子を、今の平和な時代と比べながら読みました」この本に触れたのは戦争のことを調べる夏休みの課題で。「なにがあっても生き残らなくちゃ」というせりふが印象的で、その力が伝わるよう工夫して文章にした。戦争の様子は当時機関車運転手だった祖父から、何度も聞いていた。「私のおじいちゃんも前橋空

襲の時代を生きていました。食べる物がなくて大変で、闇市の様子も話してくれました。おじいちゃんもきつと怖い思いをしたはずです」敷島小の6年生。総合学習の時間には将来の仕事のことを調べている。「調べものが好きなので、社会が好きです。今は世の中の役に立ってる公認会計士という仕事に興味があります」休み時間にも図書室によく通う。「広島原爆ドームに行ってみたくて。戦争のことは調べたいけど原爆のことはよく知らないで」。この本を読んだら、戦争や平和についてもっと知りたくなったようだ。



市民から寄せられたメッセージ

開館100周年を迎えた市立図書館。ここまで続けられたのは関係者や市民の皆さんのおかげです。恩返しのため、作り置き資料を基本に職員手時代の变化に伴い、図書館の役割も変わりつつあります。



図書館は身近な知の泉
これからもあなたのそばに



市立図書館長
作宮 朗

前橋ブック ストリート

MAEBASHI BOOK STREET

昨年、開館100周年を迎えた前橋市立図書館の今をお伝えします。

最終回



図書館は市民と本との出会いの場

まちの宝はここに

1月29日に前橋文学館でコミュニティワーク勉強会を開催。本市出身の建築家で、都内でリノベーションを手掛ける宮崎晃吉さんの講演や空き家空き地コンペの事例紹介、パネルディスカッションなどが行われ、まちの魅力を育むための意見が交わされました。

市民の価値観が多様化する中で、図書館にできることは何か。私たちは常に考え、チャレンジし続けます。今後は貸し出しを基本にしつつ、イベントなどで本を知るきっかけを広げられるような市民参加型の図書館を目指します。また、市民の宝である貴重資料のデジタル化を進め、地域の歴史研究に役立てたいですね。長年館長を務めた渋谷国忠の言葉、「より良い本を、より多くの市民に、より高い能力で」。これは図書館の使命です。市民に愛される図書館であるために、これからも創意工夫し、わくわくするような取り組みを仕掛けていきます。次の100年も市立図書館をどうぞよろしくお祈りします。